（超短編シリーズ）

柔らかい、銀色に眩暈がする。

朝日が昇ったばかりの天は、秋空にして、木枯らしが厳しく舞い降りる。叩かれる木々は苦しそうに葉を揺らし、乾いた土は砂埃を起こしやがて潰える。
吐息に眼鏡が曇り、右目が愉しそうに、こちらに視線を寄越した。

「冷えますね」

目覚めたばかりであることを伺わせる、珍しく無防備で、少しばかり枯れた、甘い声。肩を震わせたのは無意識だろうか。
途端、端正な顔が欠伸に歪んだ。

「寝不足か」
「ええ、ちょっと、ネ」

微笑んでみせたそれには、いつもより深い隈。青白い空より、この儚い男の方が随分と、

北から寒風が一つ。
同時に間の抜けたくしゃみも一つ。

問うても答えぬこの輩には、言葉も私も必要ないから。代わりに上着を一枚被せて、優しい銀色に立ち眩みを覚えた。

（私は、この男を、）

――答えは甘やかに上がった自分の口の端に。

（レイブレ）